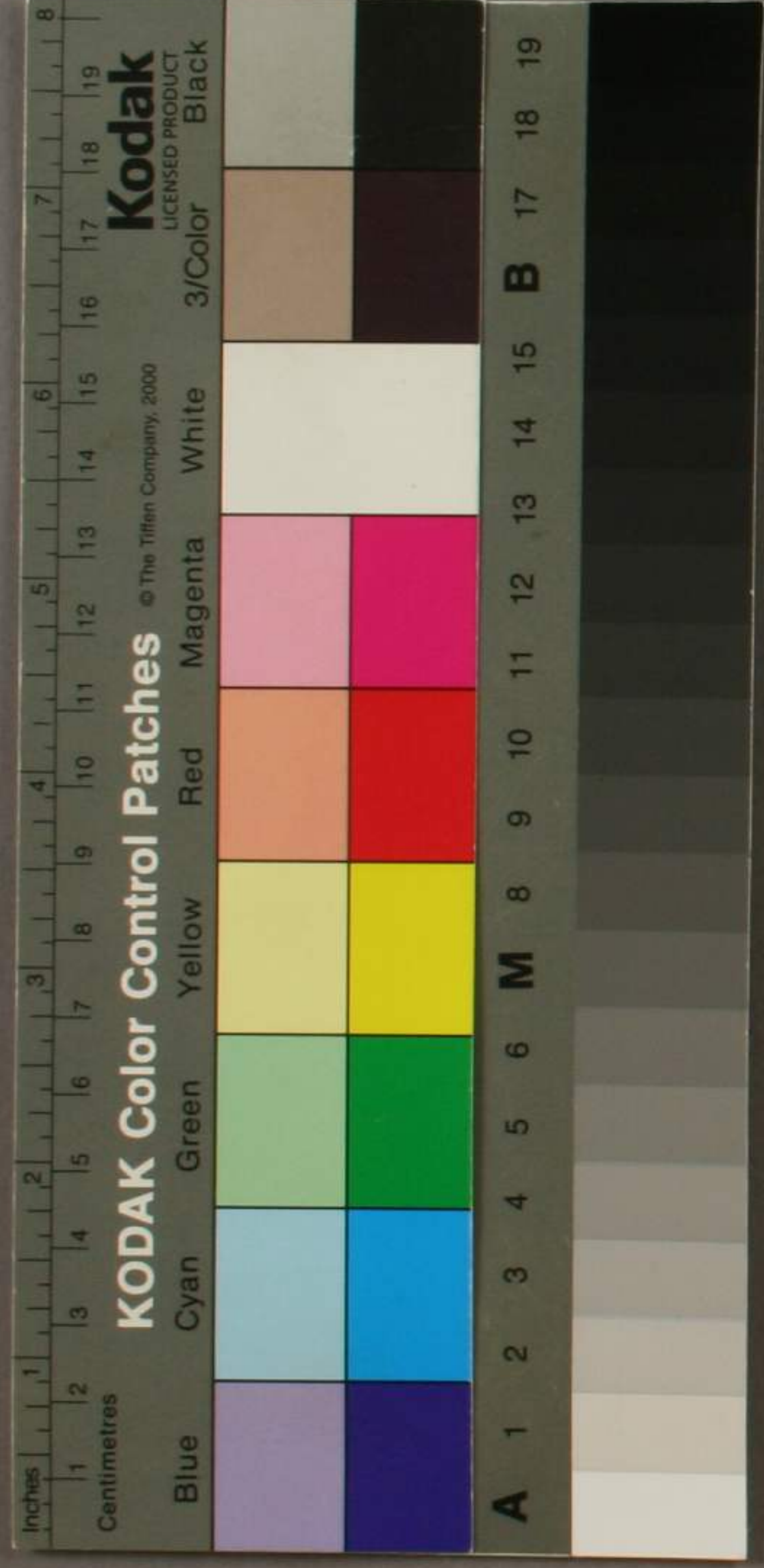




桂園冊語

二



1154
3

狂言 徳兵衛 一
の 中 二
一 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃
二 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 二 名 乃 江 下 喜 々 乃
三 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 三 名 乃 江 下 喜 々 乃
四 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 四 名 乃 江 下 喜 々 乃
五 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 五 名 乃 江 下 喜 々 乃
六 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 六 名 乃 江 下 喜 々 乃
七 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 七 名 乃 江 下 喜 々 乃
八 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 八 名 乃 江 下 喜 々 乃
九 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 九 名 乃 江 下 喜 々 乃
十 名 乃 江 下 喜 々 乃 一 名 乃 江 下 喜 々 乃 十 名 乃 江 下 喜 々 乃



桂園竹譜卷之二

の やたけ

の一名のたけ一名やたけ一名やのたけハ漢名と蘭落
一名箒箭一名箭幹竹といふその太きものハ中指より
太くやと矢とのハ季指より細し高さ大抵八九尺より
一丈許小至るその節女竹より平めかつて頗る蘆節
に似たり毎節相去ること八九寸或ハ一尺餘枝ハ始
より獨枝かゝて双枝のものなり其梢に至れも双枝或
ハ三枝なりとあれば竹の始より三枝と叢生する
ものといふの性わがわが葉ハ長さ一尺餘廣さ一

寸許して一葉小四葉五葉或ハ七八葉のものありとい
へども葉先對生ありてその餘ハ常竹のこととて
互生なり此竹新竿のものハ女竹と同じく篠落竹とい
へども年とふりとのハ女竹ハ三つに凡五つを皇朝
より矢小作とい竹ハ此竹よりとれと延喜のころハ
山城大和より貢せしとありて延喜既ハ天武天皇の時
箭竹二千建と太宰府より送らせしとまた歌内の産な
る一今も年とふ大和の芳野より難波の大城へ此
竹二千二百軒と貢せり
梯桑 記行 また備中の矢島及び
丹波等より此竹を貢し其餘の諸國よりまた極て多

今江都より皆人使用とあるハ上無しと来るとつふ
より延喜の凡ハ此竹と以て慈竹燐籠薰籠及び蘿茶籠
等と作るしとのありとも今竹器と作るもの多く篠竹
或ハ淡苔の二竹を用ゐて此竹を用ゐる事ときく一
種天台竹一名影向竹といふものあり今東叡山瑠璃殿
の左右ふたつその枝葉全く矢竹小似て矢竹よりハ細
小なりおとふ此種ハもと尋常の矢竹と移し植へ
のたよりれども竹臺の積地ありありとかくハ細
小なるよりものなり一とされる江戸砂子小影向竹ハ
上野中堂の前ふたつ葉の先丸く跡先なきやうにして

常の竹とハ異なり見えずハ今あるものと別種なり。
と云ふ書より見たる全書ニ此竹も天竺祇園精舎の
竹と宸旦の天台山一移りきと傳教大師の持来りて
山城の比叡山中堂の前小植ありきと再び東叡山に
移せしもの也と云ふ近頃京師の人予ハ比叡山の
竹葉を以て僅小一葉と送りて觀見せりとのみ
狀尋常の葉に似て少く厚きやうなものと云ふのみ
るれと江戸砂子といふもの。葉の先丸きものとハこれ
と異なり一説ニ傳教大師の携来りて竹ハ比叡山の竹
林院にありといふも又いふまた其実と知らず

日本書紀天武紀云十一年十一月癸卯朔甲辰筑紫太宰諸
諸用物施一百匹云々箭竹二千連下於筑紫
延喜式職部云凡雜役用皮料篋竹河竹各百株每羊山城
國進又篋六百株大和國進

又造酒云新給料云々篋竹世株作酒口及節柄料

又同上云鎮魂祭料云々篋竹六株

又主膳云主膳監年料云々篋竹八十株

又内西云篋竹百五十株

又司馬人云凡應供大嘗會竹器云々熬筭七十二口燂籠七

十二口料篋竹口別六株乾索餅篋二十四口口別十籠六口口別十

預前造備送宮內省

又同云羊料竹器云々葦籠大一口口徑二尺二寸 高二尺七寸料篋竹

五十株中一口口徑一尺八寸 高二尺料篋竹廿株流紙簀十枚長各二尺

四寸廣一尺四寸料篋竹各廿株茶籠廿枚方二尺料篋竹各六株

知名類聚抄類竹引唐韻云篋音昆 名乃知箭竹名也

大和本草云矢篋竹ハ節ヒキク直ニ肉厚ク葉大ナリ篠

竹ノ類ナリ

本草一家言云箭竹可以為箭幹丹波州多出之元筆管用

本草證蒙云箭竹ハ形狀メタケニ似テ細ク葉弱葉ノ如

シ

尚書禹貢云惟箇落格孔傳云箇落美竹也鄭注云箇落是兩種竹也

竹譜云箇落載籍貢名荆鄱

又云箇落二竹案此說原於鄭注亦皆中矢皆出雲夢之澤禹貢篇

出荆書云底貢厥名言具有美名故貢之也大較故是金柅

箭類目皮特黑滋以爲異呂氏春秋云略獻之箇然則南越

亦產不但荆也

山居賦云二箭殊葉并箭細葉云々

爾雅翼云箇落亦堪為矢箭大者為筆

廣西通志云箭幹竹節密肉厚

案之ハ小節密ニシテ節ハ會稽の箭竹節間三尺ニ

あふむかいていふものゝれと即今の矢竹なり

釋名

の 和名類聚

和訓聚小篋との訓む矢の度なり了今案小神

代巻よ云天照大神背負千箭之鞆千箭此云と見えたり

れハのハ即の字の下界ありとの字ハ即箭字の古訓

なり

のたけ 増補地錦 東雅

やたけ 江都方言





此即矢竹の義なり

やのたけ

和漢三才圖會植物類纂
大和本草本草一家言

此即蕭幹竹の義なり
叔蕭幹竹の名
廣西通志に見え
たり
即和漢同名なり

筍落

尚書曰
武春秋

常々木小筍柱あり
草小落草あり
即世草の一名なり
又菜小落葉菜あり
共小此筍落より出
る名なり
其物と見て
此竹の大ききより
多し
叔鄭玄の説小筍落
ハ兩種竹也
といへり
今一竹より
其説孔傳と同
古文落从輅といへり

いづれを今うけふふたれふ

筭箭山居賦

筭ハ此葉の状相似たりといふ

箭幹竹廣西通志

此幹箭小作りて一故に名づく

一種矢竹

一種の矢竹ハ今白河侯大塚の下邸にあるその高さ大抵
五六尺にして枝幹全く矢竹のごとき葉もまた矢竹に
似て五葉或ハ四葉を以て一葉とすその上葉ハ毛づく
二葉相對して每葉白色の間道ありまた一株のうちを

いへとも間道なく其色矢竹と一様なりと交それ
る此種ハ往時清佐の携到せりと長崎より輸入せりとの
うらもそのい傳ふその他またこれあり事と知らる

通絲竹

通絲竹ハ枝幹並ふ矢竹に似て節の平らなりとも
亦矢竹のごときとの葉皆仰出して上に向ひ下垂する
事なり此竹の性なりとの葉の状矢竹よりと極て細
小なり長さ一尺許廣さ三四分と過ぐ每莖むかしを
五葉を以て一葉とすその上葉のうちより上の二葉ハ
對生にして下の三葉ハ互生なりとの幹新年のものハ

釋めるといへとも年と経れを留めつゝこと矢竹の如
—この種具根窠盤結して叢生數十百幹といはれどこの
今白河侯大塚の下邸ふありと一種仰葉竹あり其竹前條
と一様ありて每莖上八九葉或ハ六七葉とつゝると異
なりと云ふ此種今鳥鴨の種樹家よりある葉ふ書の孔傳に
筒路美竹也と云ふなりとされども此竹矢竹種類のうちふ
て殊に美なりとのるれども蓋し本文ふいふやう筒路ふ
—てまた常の矢竹ハ葉の廣さ一寸許るれどもこれと
僅ふ三四分と過るれども山居賦にいふやう筭筭するを
—叔吉人の此竹と稱みて矢ふ作るとのハ其幹の直上











まろのまろの葉まろも直立して絶て餘竹と異ふ。
ハ矢の直達まろふその形状もよく叶ひぬの故也。
一尚考ふ也

釋名

通緯竹

管樹家称

此葉極て細長なりと以て遠くこれと望むるまろハ略
も絲の如くまろ至て細小なりとのハ葉の長さ二寸
許廣さ一分と過さぬと近く寄りても猶亦のこま
あふこの名を命せしむる

仰葉竹

まろ

名義字の如し

鳳凰竹 土用竹

鳳凰竹一名土用竹一名孟宗竹ハ漢名と鳳尾竹一名觀音竹といふその幹矢竹に似て大さ箸のここくまゝ著より細きものを高さ大抵二三尺にして新聞相去る事二三寸餘より四寸許小至る其枝ハをいつて獨枝にして年を経るものハその獨枝の本より別ふ一小筍と抽出てみ枝こぢりといふものと竹のここく三五枝を生ずるもの絶てなく且籜落りものハ此竹の性なり葉の状まねけり似て本廣く赤尖り長さ一寸四五分廣さ三

分許より葉本細褐色なり。ここま竹に似て極めて短く凡毎枝梢葉を排比あり。ここハ九葉より十二三葉に至ると一葉こそその倍の葉ハ大なりてそれより以上ハ一葉こそ漸く小さくその葉先の葉ハ長さ三分廣さ一分許に至るかといふものハたゞ一株叢生のうちよりその幹大なりもの、形状をみるとつとて其内より枝幹極めて緻細なりて孫のここくまゝ線力如きと文をきくといて細大のここくからん此即致富全書ふいもの。鳳尾竹高さ五六尺のものありまゝ蘆薈ふ出るものハ駿河の産ふ一二倍もの多りれその葉

の大さともまた随てありて此即江陰縣志といふ所の
鳳尾竹有高丈餘者といふもの也又此筍至て細小な
るものとも子母竹のこゝく一株のうち小叢生し他
所に出るこゝちきハ金鑑縣志といふ所の鳳尾竹又慈
竹別種なるものといふに相背し薩摩といふ所のハ其
筍尋常のものより大なるものと肇慶府志といふ所の鳳尾
竹筍大肥美といふものと暗合のものなりこれ共和漢三
才圖会に此筍最細長是苦不可食といふもの即尋常の
筍なり薩摩の産ハ必きあつたものなり物なり

過五六尺葉細三分計是後竹大如筋及箭筍而肉厚今年
生者葉亦竹畧肥大舊年者却瘦細九則平戸多有之
大和本草云鳳尾竹呼觀音竹泉州府志出本邦モアリ葉
ヒロク竹小ナリ細目ニ所謂鳳尾竹葉細三分と此異
本草一家言云有鳳尾竹六七月間抽筍和名土用竹至冬
葉枯

竹譜詳錄云鳳尾竹生江西一如筍竹但下辺枝葉稍小至
梢則葉茂如鳳尾故得此名

農政全書云鳳尾竹纖小特那植盆可作清玩

百花藏譜云鳳尾竹數種有紫梗高可三尺餘葉甚緻密其

小者高不盈尺，華生四季，生輒摘其梢枝，幹叢生，葉々排比，可當几案之玩，然不若水竹之勁秀也。

致富全書云：鳳尾竹高五六尺，竿細葉多，形如鳳尾。

群芳譜云：鳳尾竹高二三尺，纖小，摘那植盆中，可作書室清翫。

秘傳花鏡云：鳳尾竹葉幹高不過二三尺，葉細小而摘那類鳳尾，盆種可作清玩。

肇啓府志云：鳳尾竹出封川，華大肥美，為諸華冠。

漳浦縣志云：鳳尾竹梢葉森秀如鳳尾，曰志名觀音竹。

金壇縣志云：鳳尾竹以其細小似鳳尾，故名。

安慶府志云：鳳尾竹小而細，形如鳳尾，可供盆玩。

漳浦府志云：鳳尾竹通志云：梢葉森秀，狀如鳳尾。

江陰縣志云：鳳尾竹葉疎如鳳尾，有僅尺許者，有高丈餘者。

會稽縣志云：鳳尾竹葉形小，亦茲竹別種。

泉州府志云：鳳尾竹俗呼觀音竹，七邑俱有。

右畧及全書以下の諸書ハ庶物類纂ニ引所ニ以テ再
いこゝハ載セシムル

釋名

鳳凰竹 和漢三才圖會

此葉繁茂頗有鳳尾之似，乃故小名。

土用竹 本草一家言

此竹四時小筍と生ずといふとも土用中殊に多し
故に名づく

孟宗竹 和漢三才圖會

寺島良安云此筍冬月生故俗曰孟宗竹

鳳尾竹 竹譜詳錄農政全書
張富全書

名義上文小見元たす

觀音竹 泉州府志
屏浦縣志

案小葉竹、黑竹も亦觀音竹と号く二月と同名異物な

了



みろく杖と生より杖の四所至て深き杖と矢の
作りの杖きもの形に似て予のまた村松竹の葉と親見
せしといふとも蓋しそ竹の一種密節なりとの
其葉極め大なりとていつのめとたれと此節の枝と
る方の四所田より極め深し凡四所圓より深き
竹ハ此竹のもろくはとてその葉ハ大なりとの
そなるとまた竹節ハ簾亦節後概節而短又云是箭竹類一
尺數節葉大如簾といふハ即此竹の事なり

釋名

村松竹 或洛方言

村松ハ即地名なり

臺明竹 青葉笛竹

臺明竹ハ一名大妙竹一名大名竹ハ古名と青葉笛竹一
名二葉笛竹或ハこの二字を畧してたゞ笛竹とてし
漢名ハ四季竹一名四時竹といふ此竹古より大隅國贈
峽郡清水郷臺明寺山中に産す此境内ハ天延年中ハ
たゞ古鐘あり其銘ハ此山中竹茂天智天皇御宇剪為笛
竹給其音清妙謂青葉笛竹以来為笛竹貢御所と国史草
木昆夷
及見えこの竹ハ竿類若竹大者圍可五六寸節間連者達
二尺其葉青翠異常其節貫四時而生其節中含液宛如凝

脂味更美本草綱目纂疏見えたる今江都へ移し植る

のハその高さ一丈五六尺圍ミ二寸餘その根上より二三節ハその節密にして其間相去ること三四寸それより以上ハ節疎なりことハ九寸より或ハ一尺五六寸に至るまゝ地土の第一二節ハ周囲ハ細小根連り出て頗る方竹のこときも此竹始の枝ハ三枝或ハ五枝なりといふとも中幹より以上ハもつて七八枝と叢生しと此竹籜付て年を経て落葉ハ全く長節竹に似て細くして大抵八九葉と一朶とて此竹大隅國に産するものハ四時を期して生出るといふとも江都へ移し植

るものハ夏月の最盛なりハまさ小凡土の寒暖に依りての事なりといふ

和漢三才圖會云大妙竹狀似長節竹而大周三寸許葉亦大也可以作笛

又云薩摩國土產大名竹筍四時有之

大和本草云大名竹條名ナリ節間長ク赤黄ノ條アリ竹葉ニシテ不堪爲器

本草綱目纂疏云四季竹大隅臺明寺古鐘名勒青葉笛竹者是也大隅國臺明寺在平治文永謂之二葉笛或曰笛竹

薩人曰臺明竹信誤作大明竹群芳譜云四季竹節長而圓中管箬

生山石者、音清亮、大隅臺明寺山中、自往古有竹林、今尚琅玕万株、成一叢之林、其竿類苦竹、大者圍可五六寸、節間連者連二尺、以作簫簫其音妙爽、遠聞、故近古謂之簫竹、其葉狹長青翠異常、其筍貫四時而生、四季之節即出於此、其筠中含液、宛如凝脂、味更美、獨在諸筍之上、夏月最為盛、諸人以充珍饌、案臺明寺實戒藩之古刹也、檢古鐘銘此銘天延中所撰其古鐘從天智所宇迄今皆竹貢所原又檢平治建長年間之解狀文狀、其事項同二狀今尚存在其院而又建長年以後充調御之用者數回、皆載在藩之舊史、因考國史無所經見焉、蓋近古之流例、因不登錄青史、與亦不可知矣、案長府殿本平

家談載青葉簫、及播磨瀨磨寺青葉簫竹、皆別種也

魔藩名勝考、與書云、臺明寺ハ是古刹、一て山中幽邃、奇古更、小甚、一て園中、おのつうら一程の竹あり、世ハいふ青葉簫竹、是なり、つねハ一て天智の所也、とあるなり、とて寺中小鐘あり、其銘云、隅州臺明寺、是青葉簫之貢御所、白馬龍蹄之清、竭也、巖石廻外、澗水橫中、遠近仰於靈細、案板、依安古鐘銘云、天延九年之頃、鐘改、苦日之小鐘云、此銘嘉正元年丁巳冬十一月十九日、大檀那當國守護代、左尉藤原朝臣、常賴、親進者、當山住僧阿闍梨亮、千大工島麗行、則同助行、と記せり、又其寺中の竹物、二解

狀文狀敷通あり今其文一二を抄出せ工件貢押笛竹任
先例可切調進之由所令下知也云々平治元年七月十七
日目大中臣判權大掾檢前判略又臺明寺青葉笛竹為任
僧等恐切用奉職事云々永曆二年八月廿九日國代勾當
源判目大中臣判略又應保三年二月十日臺明寺大衆等
解狀の内上右證檢舊記當山者元像孤獨靈窟朝廷鎮護
道謁也天智天皇御宇之時被定笛竹貢御所達四百餘
歲根本大伽藍也云々又建長二年臺明寺勸進牒の内夫
以臺明寺者天下無雙之靈窟人間第一之梵宮也云々故
老相傳天智天皇御宇有青葉二葉笛竹貢御所自被定最

以後五百八十九歲云々可遂往生淨土之望敬白建長二
年八月九日勸進衆迄等敬白深將大師判略所謂笛竹今
も猶四時青翠よりて千株よみの吾藩の土人よかるを
知るもの罕なりまして世の人し是を知るもの少なし
嗚呼の隱顯ミなかくのここも嘆を過し

封内名勝考云大隅國嘯吟郡山路村青葉山日吉山王地

推現ミとも稱ミその地主國ハ臺明寺の門ミ西二十間
許ハ森山ありて大樟の下ミ石室と立て其故世と傳ふ

奉祀大穴持命例祭十一月未申日此一山と青葉山ミ稱
ふ地名便覽よりえたり大隅州名所の一なり青葉竹即
此山の名産佐臺明竹といふ社壇ハ益敷の杉村より昔

時名匠一の鉦を以て造立^{ツクリタテ}はるこふ

又云天智天皇太子より筑紫一郡下向の時此地一過^{オホム}臨

海を青葉竹を以て笛材の貢御所は定めらるこふ

竹の事ふつき或ハ天使と遣され或ハ論旨と給る在廳

人及臺明寺主僧へ下知し竹材と受護をへきの旨と論

され又同く武家執権の奉書寺若干通臺明寺管藏を

信小臺明寺^{信小臺明寺}臺明寺竹林山衆集院より号を自天智帝の勅

願所と稱ふ然きこも當時勅願の定願寺あると肩より

是皇太子の時此地一郡過有との後登極の望をこふ青

葉竹を以て貢御は命せらるこふといへるなるこふ筑紫

隨筆小玉か^カ天智帝統業は六年迄止またまふ其間小

九州の地を廻見遊こ^カ大隅國はいたたまひ^{此時大隅國}

ふ名はいまたな^{日向國內なり}此辺は笛ふつこるへき竹やあるこ

御所あるは當所の民此山の竹は候こて一本を青葉つ

けはらきとて奉り^カと帝笛はつくらせたまふこ

その調律ふかない音聲めとたかまはる都へ還御の

後も青葉竹から成て奉り^カ笛竹と貢まひらせよとて

大内ふもてをや^カ敷^カ笛ふ造出されける不こふ世に

小傳り^カも多^カ青葉小平家敷盛なるもこれを秘藏せ

しと信小敷盛の笛ハ節ふひ^カき作られたるのち輝ふと

青葉と生したる事といひなする其本とくらぬみた
る事など記したる此事いふが傳へあるを記した
るいふは其ともその実と得たるといふおもたるなり
又青葉竹と今臺明竹といふ他國の竹なきものなり
蒲葉竹といふ同じく朝廷の所用の竹なきものなり

竹譜詳錄云四季竹出浙東慶元山中浙西亦或有之高不
過八九尺節如若竹筍如箭枝生節間叢密小穉亦隨生
節間不脫落葉長細而柔媚甚宜圖書又名四時竹以四時
生筍故名冬春筍大夏秋筍小

群芳譜云四季竹節長而圓中管簾生山石者音清亮農政全書

同

秘傳花鏡云四季竹四季生筍節節長而圓取為樂器聲中

管簾若生山谷者音更清亮可人

台州府志云四季竹四季生筍不絕

釋名

臺明竹

本草綱目纂疏
封內名勝考

臺明寺小產之故小名つく薩摩の方言也といへり

大妙竹

和漢三才圖會

大名竹

全上、大和本草

案は臺明竹と大明竹或は大名竹と作るものハ共々

假借なり懷竹抄一本は黄竹ハ耳竹ニ似たれども大
名の海の竹なりと見えたるをされど大名竹ハ近時の
名ふあらん

青葉笛竹 曼明寺古鐘名平治文書

二葉笛竹 建長解文

笛竹 平治文書

青葉竹 笈埃隨筆

四季竹 竹譜詳錄
群芳譜

四時竹 竹譜詳錄

此笛四時小生を故に此二名あり

心誤

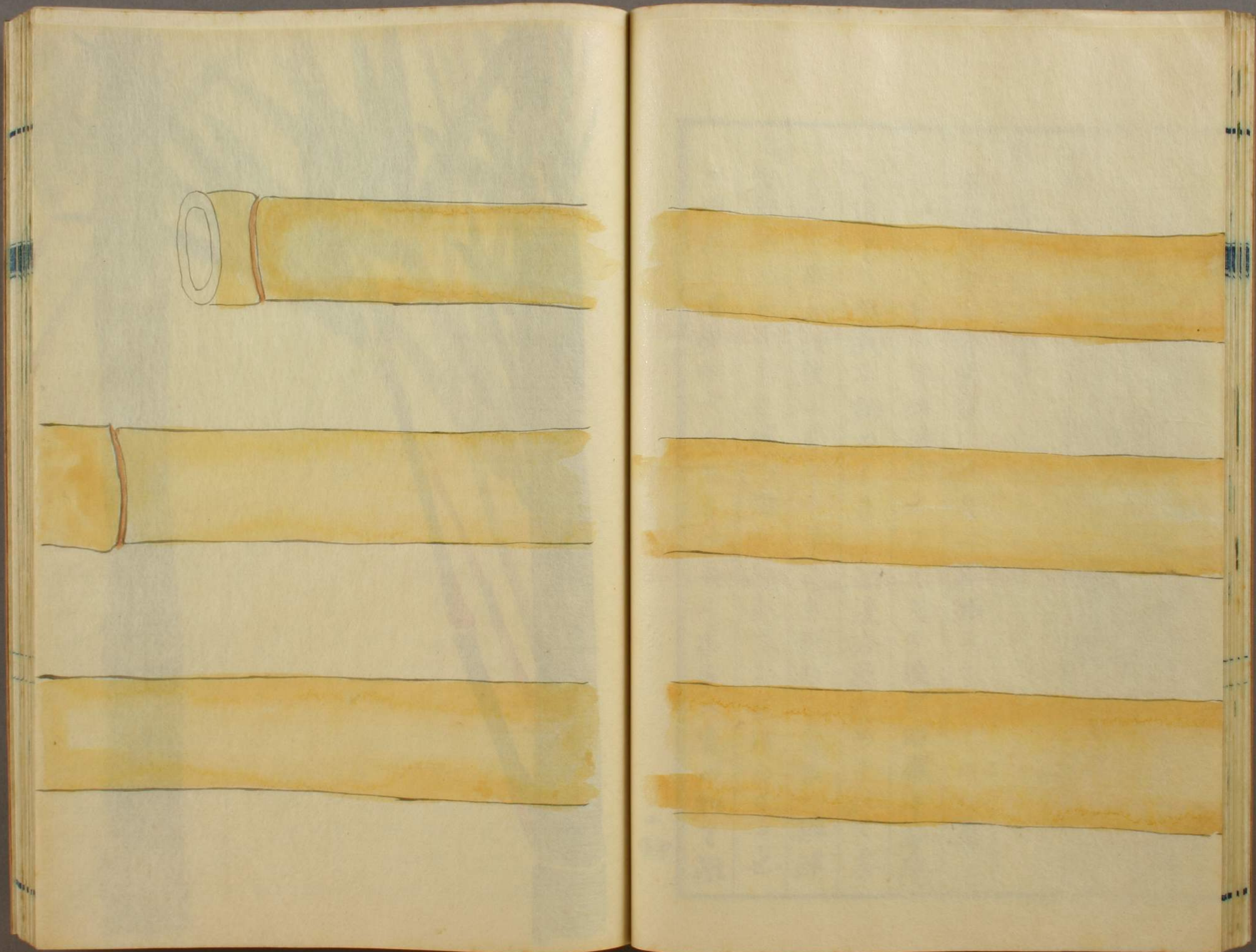
體源抄云青葉ノ笛ハ耳竹笛也昔ニ蟬ニ碧鮮ノ二葉ア
リ白露常ニ其上ニ凝ル故ニ青葉ト稱ス尤靈物トスル
ニ足レリ

案ハ青葉笛ハ青葉笛竹トて作まふよりハ鑑ニ曼明
寺古鐘銘及ハ平治建長の文書解状トてある一然る
ところハ耳竹トて作るといへるハ傳聞の誤りなり
また東齋隨筆ハ青葉笛ハまた鬼丸ともいふ雀朱門
の檮上の鬼の笛なりと伯雅の三位のときかいつて
吹て得らき一笛なり此笛ハ葉二ツありて具色一

ツハ青一是は朝こころは露おけるといへることも事
と奇ふせ。誤るや。

俗傳は新永の比平教盛の持し笛ハ即青葉の笛とて今
現は揚津國瀨磨寺の什物とありといへり

春湊浪詔云青葉笛ハ無双の名物とてしめハ葉二
こひけること江談抄よりえその後宇治殿平尊院
と造りて宝藏に納めらるゝと後冷泉院めされて参
らせし事も江談に見えしと有職抄は青葉ハ揚津
瀨磨ふあるよし言傳へ侍り傳記など見侍らるゝ也
とあれは瀨磨寺ふあるものその虚实ハ究め知難







一此青葉實なるものなりと天下第一の名管とて富
家殿^{忠実}の仰ふ本朝の横笛ハ葉二と以て第一とし
弟二青竹弟三柯亭弟四大水龍弟五小水龍なりと體
源抄にええ一和とのなりと一とせ旅行の次ふ
見ふ名あるものなりとてあらぬものなり
一又云青葉と教盛の物といふ不審し平家物語に
も盛衰記に教盛の最期に勝ふさき一笛ハ小枝
とあり又高倉の宮の御最期まゝと御勝ふさきせ給
ふことふも小枝なりこの笛治承四年ノ光明山の鳥
居の前より宮御ことあり一後ハ教盛の手より渡りし

かとおもふは是ハ同名の別物なり此小枝ハ平
忠盛笛の工手にて島羽院より下賜と經盛相傳
ありより數盛のたまふと平家物語あり盛衰記
にも經盛砂金百両宋朝へ貢とて求らるる笛也と
んそいつりむの載り人宮のたまふ河笛ハ有
載抄に引記せし兼平三年四月の笛の目錄の中に見
えたる小枝なりと二つあり今傳えらるるありあ
らきうらるる長門本ハも紫檀の家に入たる溪竹の
簞箒にええてその録の異本も青葉といふ事ハ見
えり

一種大名竹

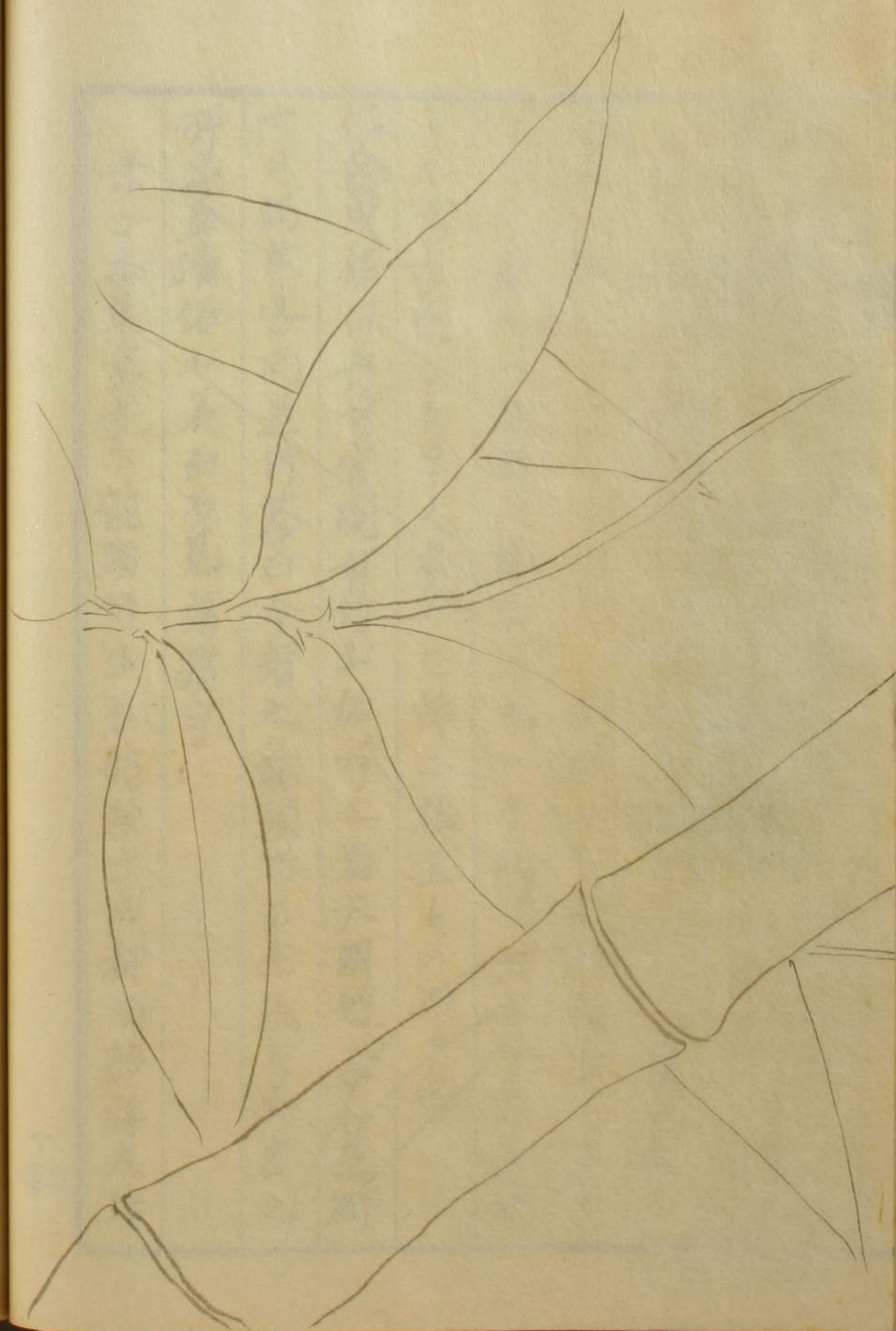
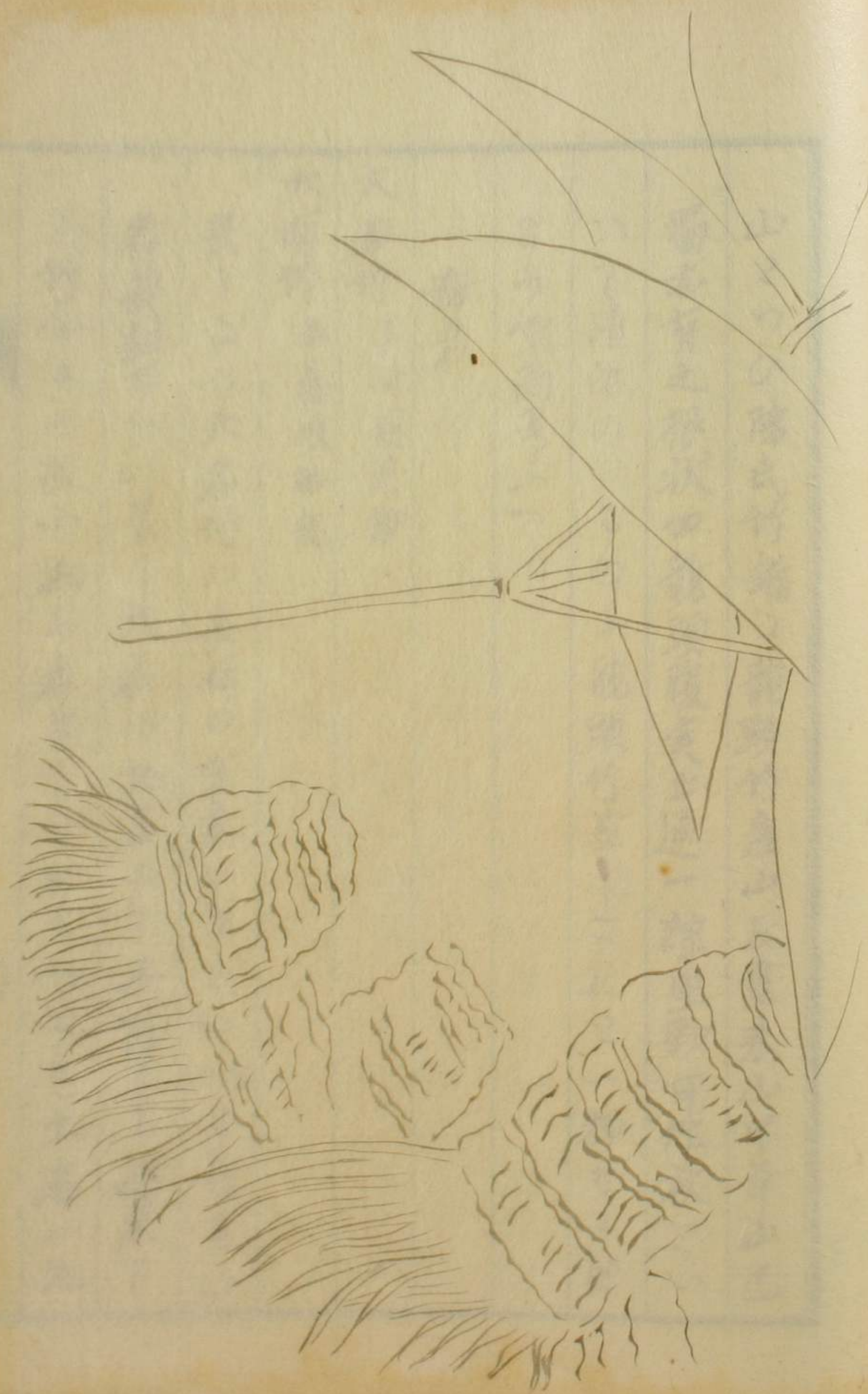
一種大名竹一名大明竹ハ清俗ニれと龍頭竹といふ此
種ハ往時商舶の載來とて肥前國長崎の官園に植ら
れたるその葉ハ孟宗竹に似て大さ筵簀のこころ幹の
太さ徑一寸六分許毎枝疎より節高からる其根數株
地上ふあらるれ出て龍頭の如しと佐藤成祐記いひまゝ大
名竹ハ大ふして其葉やうらかふ見の八九月のころ筍
を生してまゝ大なるを長崎聞見録ええたるをその他まゝ此
竹の目こととさめり

長崎聞見録云長崎の人大名竹といふハ此一種のものの

明々此竹大ふしてその葉知らぬ見ゆ八九月のころ
笋と生てこれまゝ至て長大なるまゝと知らぬ味ひ
くわく祖皮を去り切て一兩日も水ふひたり置後煮て
食ふ一きぢりまゝのまゝ味あり此竹薩摩ふ多き
こぢり唐人の食料ふ持きたりハまゝく大ききと長崎
うて洲葉園にある人家ふと稀ふ植置ものあり也
佐藤成祐曰長崎官園有竹土俗呼之為大明竹余在是郷
一日偶華客問是竹答曰今謂之龍頭竹云余未考此名之
所出蓋諸俗土名而不見諸籍字

案本草彙言小龍頭竹生若龍頭出成都府彭縣大階





山といひ陳氏竹譜に龍頭竹産山左登来山中華山已
蜀亦有之根状如龍頭腹突止通一線堅勁可作杖とい
ひ清俗のいふや龍頭竹蓋これ一物なりと
さや尚考ふ

釋名

大名竹

長崎聞見錄

大明竹

佐藤成祐説

案此の大名竹ハ長崎の方言なりといふともその
名義詳ならず蓋大名ハ地名なり其所より持来り
し竹なり故に其の名を大名といふとも大名ハ北

京の地名なりと見え強ていひ難か。一々
依ふ大明燈といふハ其葉常のかうと見え長大
して異やうのものなりと此種ハもと大明と見え
もといふ意なり依ふ大明か」と名付しものなり
此竹の大名もまた大明の字の假借なり即大明と
見えといふ意ありと見え

正誤

長崎間見録云大名竹ハ薩摩少と多し

案ハ薩摩少多しといふ大名竹ハ蓋し曇明竹
てそれと依ふ大名竹もといふと同名ふらして二種

混同せしものなり又案ハ和漢三才図会ハ大
竹似長節竹而大周三寸許葉亦大也可作笛といふ
大竹ハ即大名竹ハ同し故ハ国産部ハ大名竹筍
四時有之と見えたりと見え長崎ハ移し植し舶来の
ものと薩摩ハ産せし本邦自生のものと其の葉ハ同
種なり今種樹家よりいふ大名竹の葉長節竹より細
小なりハその形状三才図会に相及されと蓋し別種
なりと見え

一種大名竹

一種大名竹一名たしまたけ一名大明竹一名陽明竹ハ

その高さ一二丈許徑八九分或ハ一寸餘節ハ一寸七厘
似て毎節相去る事八九寸枝ハその十二三節以上より
始めて双枝或ハ三枝と生ゝ其次より毎節六七枝と
叢生して相去る間ハ此枝ハも密に生ずる事
こゝに長さ七八寸或ハ一尺餘其枝節ハ最密なり其
間相去る事一寸四五分葉ハ其先ハ二葉相對し其下ハ
四葉互生し是より六葉と以て一葉と云ふ事ハ其下の
六葉下ハ別ハ一葉の如く落し細葉なりと云ふハ全形
ハ蓋し七葉ふりし其の葉の長さ葉先の二葉ハ五六
寸より廣さ六七分其下の四葉ハそれより少く短

しつゝ又長短細大の異なりあり根上より
十二三節の間ハ竹身正圓なり枝と生ぜし所より四
五節の間ハ凹所ありて雌竹よりや長くと云ふは
正ふにたゞハ凹所雄竹ハ似て最深く正身と削去し
か如し毎枝節も是より凹所ありて事まゝ相幹と云ふ
又始の双枝と生ぜし下の一二節ハ必しも未年乃至
兩三枝と生ぜしき小葉ありて事布袋竹の如し其の
本幹のものハしめ筋と生じて竹と云ふは従ひて枯
落せしむ枝籜ハさうふ年を経て落さる事正し雌竹
の籜ハ一節より又此竹叢林中より根上第一二節上

一黄牙と生る。この竹は茅四節或ハ茅六七節より
 して黄牙と生る。この竹は比より其黄牙
 上より四所より異なり。また根上より茅八九節ハ
 双枝と生る。これより以上ハ皆五六枝と生る。この竹
 茅十立節より一より独枝と生る。これより以上ハ三
 枝五枝或ハ七八枝と生る。この竹は又根元ハ絶て黄
 牙なく。茅四節より四枝と生る。これより二節ハ三
 枝よりしてそれより以上ハ五六枝と生る。この竹は始
 め双枝と生る。事二節よりしてそれより一節ハ独枝と
 生る。それより二節ハ三枝と生る。この竹は又根本の二









三節ハ地中と離きて周囲ハ細小根と連絡生まるとき
顔る方竹のこきもあれと絶てその細小根の地よ
あらるゝこきもあれとて其竹の新旧及び長
短よみてわの異同あるこき如此るれ必そ一幹
竹と以てその形状をつくそへあらさるハ此竹の種類
の天稟なり

釋名

大名竹

鹿物類纂廣大和
本草和訓栞

山城國の方言なりといふ葉ハ此大名竹ハ枝葉臺
明竹ハ似たるふよきて名つくまの以て大名即臺明

の假借なり

たにもたけ

唐物類纂

越中の方言なりといひ此即大名竹の首呼なり

大明竹

全上

これまた豊明竹の假借なり

陽明竹

程樹家称

陽明の義詳なり或ハ此竹も越中_ノ陽明_ノの_ハなりと云ふ一故ハ此の_ハなりと云ふなり

正誤

廣大和本草云大明竹和名タイミヤウチク俗ニ字大名

ト書ス一名ヲ廣東竹ト云續竹譜及大明一統志等ニ見
エタリ

案ニ廣大和本草の杜撰を説の多きは皆世の人知れ
る所なれ今再びこれをいへん人もいへるれを續
竹譜ハ元の劉美之の著を所して其書中絶て大明
竹の名なし大明一統志も此名ありことと云ふに
即ちふふこれハ大明竹の名なりと云ふ杜撰ハ一統志
を以て大名の号ハ鎌倉の頃より諸侯の称ニ當り
て其部藩閩東の多し今も京師の俗ハ閩東大名と
いへる詞ありと云ふ杜撰ハその音の相似なりと

以て廣東竹の一名と思ひ付しを説きし

和訓栞云たいみやうなけハ大明竹と書し續竹譜に見
ゆ葉平竹といふ

案よ谷川士清嘗て廣大和本草の妄説多きことと知
らば漫々大明竹の名續竹譜に記さるゝといふハ全
く直海龍の杜撰と受けつゝ一りたり又葉平竹とい
て大名竹に左様とてつゝ其の誤まり

葉平竹

葉平竹一名和合竹一名ちよ竹ハ高さ一丈四寸又ハ
て圓ミ一寸六七分との根上第一節より毎節左右互ハ

四所及ハ小葉牙ありその四所ハ下節より上節下よ至
るにつつとも葉竹よりハそのもゝ至てせまうして且
淺ハかりと此竹ハその葉牙あり七八節を経て始め
獨枝を生しそ好まざるまゝ三四節の間ハおのゝ三枝と
分ちその三四節より以上ハ四枝或ハ五枝と分つ其三
枝よりハ中枝の長さ二尺七八寸もあり左石の枝ハ
中々短くして長さ二尺許りの四枝なりハ一枝僅ハ四
五寸ありて三枝のうちの短きものよりまゝ短く葉
ハ其竹ハ似て中々長大なうて六七葉と一葉こそその
長さ六七寸廣さ七八分或ハ一寸許りの葉の正中ハ

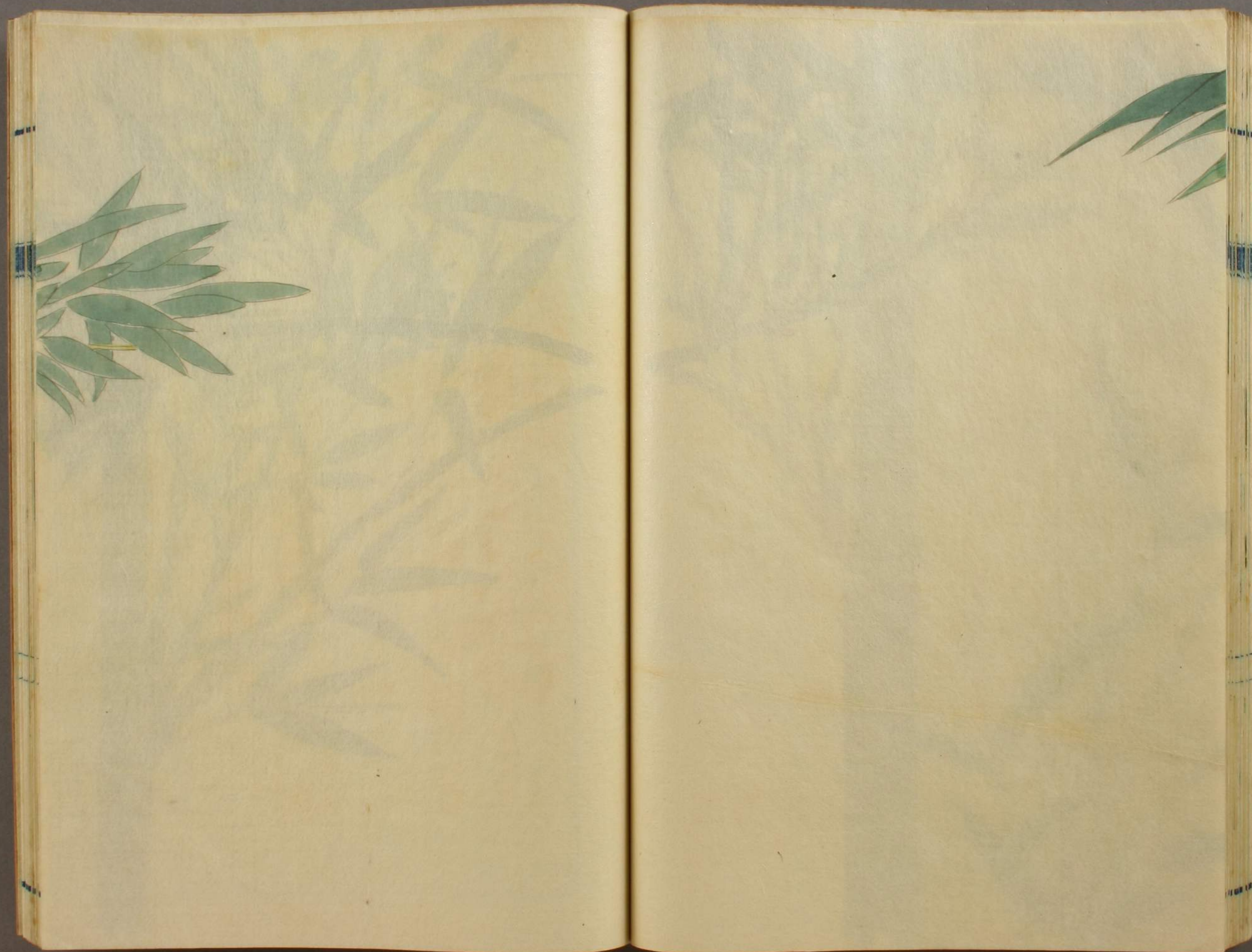
淡黄色なり。一縦細道ありてその右ありとわかれ七線
 路あり共々相並ひて葉末より葉先ふいたりとの葉末
 よりあるは雄竹の如き長さ二三分許の細毛あり
 此竹大異一種の大名竹に似て其節同相ある事又八九
 寸あるものなり。毎枚却て大名竹に似てもや、長きと
 以てこれと大名竹を比せども其枚葉まゝ疎きをこれ
 新竹の形状なり。つとめ年と経るものハ旧枝の外
 別々小篠と相出て新枝を分ち枚葉殊に茂りこれ共其
 梢より至るものハ新旧とも極めて柔弱なり。或ハ左或
 ハ右ハ下無きものハこれ等の天葉なり。此竹今本所















中の郷南藏院境内なる業平天神の社側及び亀井戸天
神の社前其外本所中如く多しこれハ蓋し竹譜詳録
に載る所の龍尾竹の一種であるべきや一種琉球
竹ある其枝葉大かく業平竹と一様なりとてとも新竹
の時ハ毎節必ず三枝を生しとの節間ハ細褐毛あり其
梢折に至りて一種の大名竹とありく直上して下葉
とることなきと異なりとも又此筍ハ一種の大名竹及
ひ業平竹と一様なりといへとも毎節上の小葉至て狭
長なりハ此筍の天稔なり

和籙三才圖會云業平竹似長節竹而葉似苦竹業者名之

中将葉平之容貌人以爲女而男也此竹擬之名乎

本草一家言云有簾竹和名葉平竹又名葉興竹

增補地錦抄云はるのら竹ハを竹の如くして節ハ女竹
のこもー女竹男竹の見分なき故ハなるのらといふよ

釋名

葉平竹 和名三才圖會本草
一家言增補地錦抄

名義上文に見えたり

和合竹 南藏院称

案ハ此竹也社内ハ植ハいつの頃より其初

と知らるゝといつゝも其側ハ木札と建て和合竹の名
とありたりこれハ男女の中腰すゝあらぬハ此竹
の枝葉と細白紙とを結びおく時ハおのきとその中
和合しうらとてされと此名ハ葉平朝臣の好色の事
といふきと漫ハ巧ニ出せし強名なり

なよ竹 本草一家言

此なよ竹ハ捐抄至て知らぬわゝて下筆し易きあよ
とて名付しなり古ハいふなよ竹なり竹のなよ竹ハ
ハあらぬ凡なる竹ハ長節竹の義なり其節の延びた
るをさして名付しとのなりハ此竹ハ左まて節の遠

きとのふあらうれとなゆ竹と名つくる方志の
これと松岡成章のたうふ此竹と以て古のなよ
竹と擬せしと云ふなり

琉球竹 俗稱

心誤

和漢三才図会云葉平竹似長節竹而葉似苦竹葉

増補地錦抄云なる山ら竹ハ男竹の如くあり節ハ女竹

のこり

葉ハ葉平竹ハその葉女竹より節ハ男竹の如し然る
と此ニ統一ハ葉似苦竹と云ふハ一ハ節女竹のこり

こつふハ共ハ誤なり

南藏院傳説云在原の葉平朝臣歌枕に武藏国みよ

の里に住所とありて時末世のためかあちとみ

つら彫刻せらるゝと里人社となく葉平天神とま

つる即當院内社なりとの社のありと以て竹も亦葉平

竹と稱せり

葉ハ葉平朝臣のこつふ来らるゝと云ふも妄説なり

うふ此竹此境内のものあらうれと此説なり

あちふ葉平竹ハその状たをやかると以て名付

しうれとありてこつふ神 と竹とのその名同し

きふふとて後ふううー植ふとあるやう

簫竹

こまちたけハ漢名と簫竹といひ琉球名と麻手古竹といふ今本所外手街新天小路青木氏庭中小ありその竹高さ一丈五尺許径六七分節隆起して頗る節竹の如しりとりとも節竹より至て低しその節間相去ることおかし一尺餘毎節三枝を生しその枝諸竹より殊に長し毎枝七八葉或ハ十葉或ハ十二三葉をつくその一葉の状苦竹に似て極めて大よして頗る葉葉のこきくその葉本より細褐毛ありと云亦苦竹の如しこの節

諸竹に同じく四五月の頃生えりとも秋に至れども又根節上再び小筍と抽出て年を経て枝となり此竹嶺南に生えりとのハ秋根旁大筍と出し綿々として絶え

竹諸
詳解

りつとも本邦のえのいふやうにこれハ風土の寒

暖の異なりとありふとてなるまに江西の人ハ此竹の下節間を生えり小筍と墜りてこれを植ふも亦活もこ同いふこれハ本邦のくも駿州薩那等の温暖の國にまであるやうな時ハ必生を育て一収此竹の大小の別あり儀禮注ハ簫笙簫之属といへるハ細小なりとのといひ尚書小雅簫といふハその書橋抽注ハ小な

るを橘といひ大なりと袖といふ例より此箒ハ即長大
るものといふまた説文ハ箒可爲幹箒可爲矢と見え
たる此幹といへるハ即弓幹の事なりこれと箒管の
屬より長大なりとの字をこれと爾雅疏ハ李巡と引て
竹節相去一丈曰箒といへるもまた一物なりと別種ハ
ハありて既ハ丹州同竹ハ載せし箒竹ハ徑一寸許のこ
のるれもこの竹温暖の地ハ産するものハ極めて長大
調節のこのあり事明らる

丹州同竹云箒竹疏名麻手古竹蓋水翁云苦竹大葉者其
葉似箒而色淺綠

尚書

禹

云箒箒既敷

孔注云
箒竹

儀禮

大射

云箒在建鼓之間

鄭注云謂
箒簫之屬

爾雅

釋

云箒竹

鄭注云
竹別名

説文云箒大竹也ハ竹湯聲夏書云琤琕箒箒之可爲幹箒
可爲矢

爾雅疏引李巡云竹節相去一丈曰箒又引孫炎云竹同節
者曰箒

拉海虞衡志云箒竹葉大且密畧如蘆葦

陽春縣志云箒竹莖直節疎有類水竹其筍亦佳

竹譜詳錄云箒竹嶺南江廣之間俱有之叢生極高葉大且

密一葉有生至十八九葉者節上每生小筍三、籜破成枝中
間一枝彷彿与本身葉傍二枝亦能大、皆橫出、尤易植、至秋
根旁出大筍、綿綿不絕、隔年成竹、或云、壁下節間筍植之亦
活、江西人呼為橫枝竹、筍色甚白、味甚佳、名玉版筍、過母稍
極細長、彎曲垂下、如柳絲搖曳

釋名

小町竹

案、小町竹ハ青木氏より從來申傳へたる名、少く之
ハ葉平竹、又ハ女子竹、又ハつゝ、たゞハ、其
竹の状、柔麗なりと云ふ









東穀竹譜所載蕩竹之圖



竹譜詳錄所載簾竹之圖



簾竹

尚書儀爾雅
疏文

本草一家言云簾高天之意案小虞書湯之洪水方割と
つひまた詩斷風之也淇水湯々といつと其湯々ハ即
水の盛なり貌なりと簾竹の簾もまた湯々の湯の如
く竹の高大なりとのをといふ

麻手古竹

丹州園竹

麻手古竹ハ琬華名なりといふ

正誤

本草一家言云簾竹和名葉平竹而書稱簾之簾大竹也一
節中入米一升豐後大角村生此竹呼大角竹與前條葉平

竹同名異物也

案、爾雅疏、蕩無大小之異、といへるハ、大小皆蕩竹
なりとす。然るに一家言ハ、大角竹と大角竹と、小
角竹と、葉平竹と、分て二種とす。是ハ誤れといふ也。
大角竹ハ、蓋、蕩竹の一種とす。葉平竹と、此
當のものとあらず。

爾雅云蕩竹

案、竹字の玉蓋、書の孔傳より、大の字脱せ
置、補ふ。云、蕩大竹と、説文の蕩大竹也。こ
れ古来相傳の定説なり。然るに鄭注ハ、竹

別名とのいへるハ、さぐりともたゞハ、きこえた。
やうなれ共、この實ハ、本文の缺文あり。ことと知ら
る誤なり。

玉篇云蕩徒堂切唐韻云蕩徒朗切

案、蕩字古聲煬養の如し。故に説文、蕩从竹湯聲。水
部云、湯从水易聲。黑部、賜从黑易聲。讀若煬。又高誘注、淮
南子云、煬養と見えたり。その他、陽从阜易聲。煬从日易
聲。蕩从竹易聲とあり。皆同聲なり。然るに玉篇以下
蕩湯蕩と以て徒堂切す。徒朗切とす。是れハ、是近
音なり。この實ハ、訛聲なり。

疏節竹

疎節竹ハ和漢通名ニシテ其節間極メテ長キ竹ヲルヲ笛
ト造ルル至テヨリ一節の間三尺許リハ笛二管ニ
シテ四尺許リハ三管トシテ用フ今筑後國柳川の
丹州 圖竹 川又ニ東海道大坂の驛カモ鴨立沢の西行
法師の遺物トシテ竹杖アリテ其長さ四尺大ニ一握許
テその西端ハ節アリ一説ニ此杖ハ室曆のころ長崎の
譯司吉雄奉作ガ贈ミヨリナリト云ハ西行のつぎ
一節のつぎハ同ノ如キ

北戸録云高藩州出千歲蕨杖之類甚多更有疏節竹五

六尺一節僧道多以爲杖

農政全書云疎^節竹六尺一節

本草彙言云疏節竹五六尺一節出高藩州見通志

秘傳花鏡云疏節竹其葉最長每一節差一寸許出自黎母

山陽

俗説云今鴨立沢カモ鴨立沢ハそのおろし西行法師
のつぎ一杖ナリト云フ

紫云鴨立沢ハ今大坂の内なる小坂ニツキテ今カ
モ此地ハ西行法師の鴨立沢の秋の夕ぐれニハ
ニ歌ミナリト云フ建教師宗祇の紫菴ト云ハ居ラセ

一ところみそうらゝおく我うけあうらせのうきや
 一とぬ崩こいうやまれぬとすみハそのとき
 弥る。一その後まこ三千風といふ誹人^{誰カ}もその遺
 跡と一たひてこてふ位居せるとき鳴たち一沢辺の
 蒼とふきうつてこころうきるのあひひ出あせんと
 しみハ今その碑ふ残まをまこ六十蘇州一枚杖三
 千世界兩眼中といふ對句も此とこころうその事なり
 一と一この秋吉雄筆作うものふあらうれを或ハ三
 千風のつきしとものうらや

丹州岡竹所載疏節竹之図



尺八竹

尺八竹ハ漢名と通竹一名通節竹一名無節竹といふ此
種ハ孝謙天皇の御代ニ中將姫の藏ニ曼陀羅の軸北戸ふせ
し竹北戸蓋北戸一種なり凡疎節竹ハ一節の間大抵五六尺
羅ハ幅一丈五尺あり北戸和漢三北戸いぬハその軸北戸ふせて
節なき竹ハ即通竹なり北戸こ明らる北戸一叔此竹西土北戸
ハ濤州北戸の産北戸一北戸本邦北戸ハ備後國北戸の産北戸なり北戸
いふとその他北戸ありと知る北戸
和漢三才図会云中將姫者横佩右大臣豊成之女也云々

禪尼未云卅當調敷萬蓮絲織曼陀羅也事啟闕初忍海連
今採近江大和河内三國蓮莖獻九十余駄化女來設藥三
把油二升浸油於藥者燈灰子丑三時織成曼陀羅其幅一
丈五尺用無節竹爲軸矣此三國無双靈寶也

案云當麻曼陀羅緣起圖說云此曼陀羅の化人用蓮莖
取絲之所織也幅方一丈五尺以一夜生無節竹爲軸子
丑寅三時造就云云云云云云云云云云云云云云云云云
夜ふ生せし無節竹を以て尋常の通竹よりもあつさ
るゝ似たりと尚存す云々

本草綱目云無節竹出備後縣谷俗呼尺八竹

北戸錄云案王景曰秦州通竹直上無節空心也

華夷花木考案花詳注同

本草綱目云無節竹出秦州空心直上即通竹也

秘傳花鏡云通節竹產於秦州其幹直上無節而中心空洞
無隔亦異種也

釋名

尺八竹 本草綱目

案云無節のものゝ尺八の名あり事なり云々
或ハ此竹を以て尺八の笛と造るゝ云々云々云々
て此名を命せしやまゝ尺八ハ丈八の誤り云々

節間一丈八尺もあつたといふ意であるといふも
いふたとの実と知らる

通竹

北戸録本
草綱目

本草啓蒙云無節竹ハ節の隔るゝ空心ゝゝて漏る
用ゝつきの故ハ通竹の名あると康熙字典又通竹作
る

通節竹

秘傳花鏡

無節竹

本草綱目

心誤

本草啓蒙云本草洞詮と引て云無節竹一名無心竹

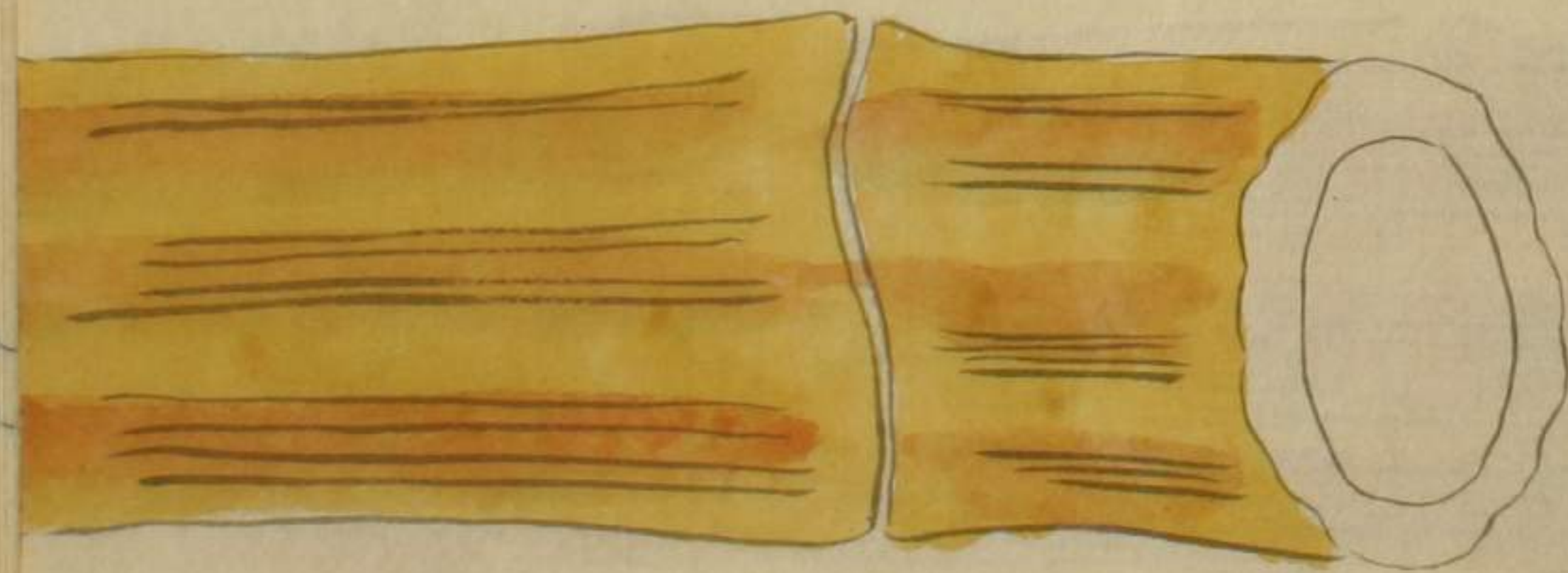
案云此竹空心直上の名のなりハ無心の名疑ハ其
空心直上の字ハ北戸録及本草綱目よりとるなり
此無心ハ蓋し空心の誤なりとあるのみや

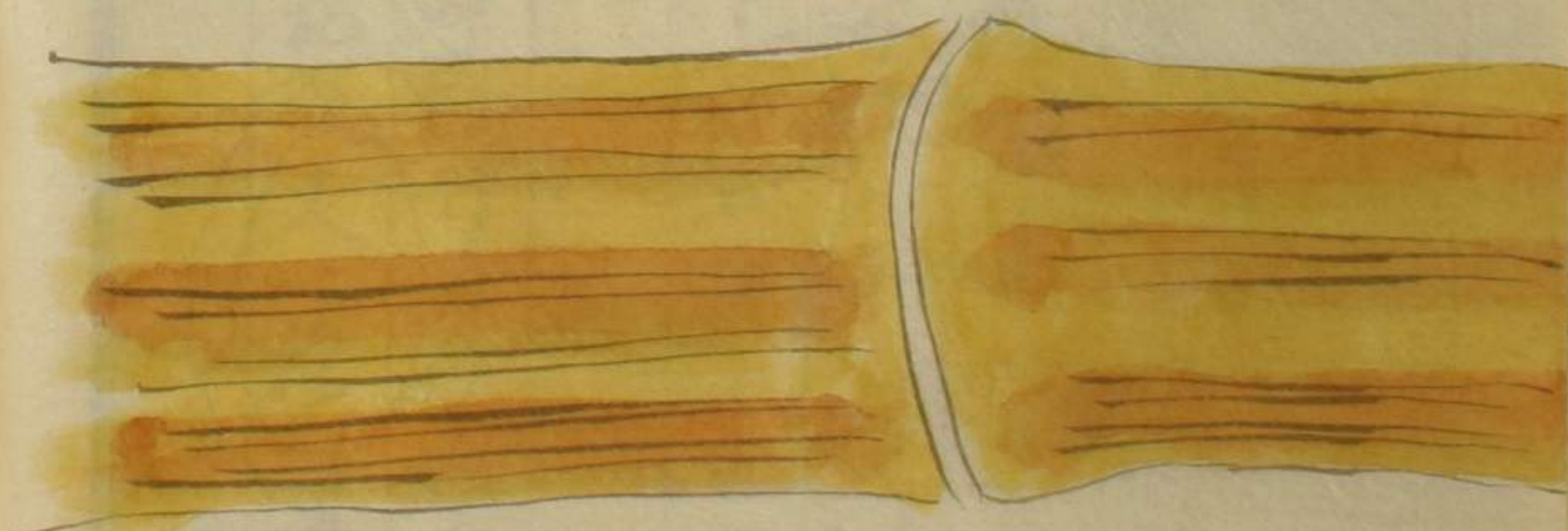
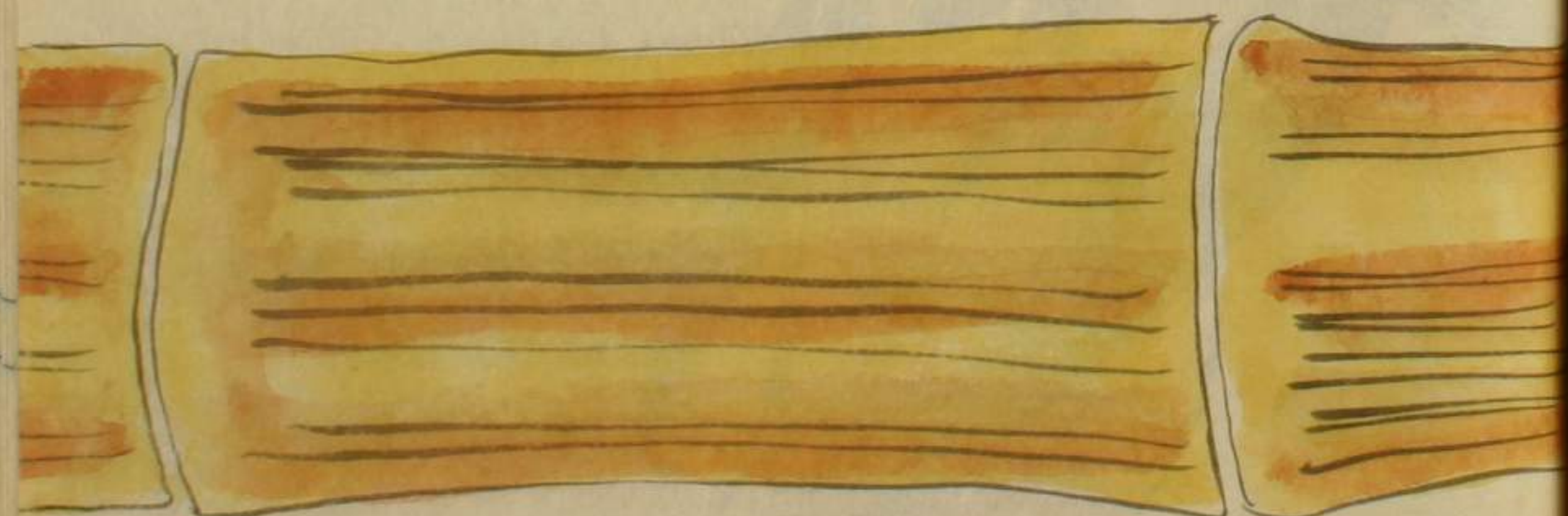
三は竹

三は竹ハ阿波國の名産なり予並頃得ハ幹の長さ三
尺許りと周囲ハ四所ハ四所縦道ありて下節上より上節下
よりたるとその四所ハ四所の異ありておのゝ同し
かり節ハ五節ありて第一節ハその間相去ること四
寸九分第二節ハその間五寸六分第三節四節ハその
間六寸六分或ハ七寸二分もあるとの節の状若竹よ

ことと倦くして願ふ漆竹のことときこ竹肉と細查まね
 る上下の肉ハ左右の肉よりも少く厚きと以てたて
 の徑一寸九分横の徑一寸七分おこ竹身正圓あらさ
 るものいこの竹の性なるを一種山竹とつやらのめをこ
 きと前條の地をれととの四折やあさし本草一この
 二種ハ実ハ本邦の異竹として西土廣くさつと未
 たこれめりとさきつる

本草一家言云阿波國有異竹呼鋸竹其幹綴面線路有縱
 文幹大者徑數寸好事者以作花瓶又一種線溝者呼山竹
 一類一種也







釋名

志不竹

本草一家言

案は志不竹と一家言ふ皺竹を作して皺面線路あり
こつて「志不」は「即」は「の」依語なり「」或ハ物の枯
萎するに似ハ皺文ありとのるれと「志」は「竹」の義な
るもまた知るべし

山竹 全上

この二名ハ其ハ阿波國の方言なり

いしら竹

いしら竹一名しら竹ハ漢名と棘竹一名刺竹一名刺勒

一名勒竹一名芭竹一名攤竹一名芭籬竹一名筍竹一名
筍竹竹一名筍竹一名荅黎竹といふ今此種絶て植る者
少といふと和漢三才圖會云赫竹希ふこれありと
いひ東叢竹譜云とす刺竹の圖と載せたる其圖の出
るところ未だ詳ありとといふといふものなり竹の
名ハ既ニ増補多識編に見えたりといふものなり旧ハ
已しとのありといふ

和漢三才圖會云赫竹希有之然小而未見大者

竹譜云赫竹解深一叢為林根如推轂節若束鍼亦曰芭竹
城固是任茂筍既食鬚髮則侵

又云赫竹生交州諸郡叢生有數十莖大者二尺圍肉擘裂
實中夷人破以為弓拔節皆有利彼人種以為城卒不可攻
萬震異物志云種為藩若阻過層墻者也或卒崩根出大如
十石物縱橫相兼如縵車一名芭竹見三倉筍味落人鬚髮
竹譜詳錄云筍竹一名籬竹一名荅黎竹一名攤竹一名筍
竹出廣石西江安南尤多即赫竹也南方呼刺為筍叢生大
者二尺圍肉至厚幾於實中彼人破以為弓拔枝葉喜下垂
自根至梢每枝節間對生二刺尖銳弯曲如鉤人家環植以
為垣墻初植數莖作一叢三五年後枝蔓自糾纏人多鉤刺
雖鷄犬羔豚不能往又竹譜云赫竹解深一叢為林云南

方輿物志云棘竹有刺長七八丈大如甕

酉陽雜俎云棘竹一名筴節皆有刺數十莖為叢南夷種以為城卒不可攻或自崩根出大如酒甕縱橫相束狀如車筍食之落人齒按此棘竹即筴竹刺竹是也廣志名攤竹嶺表錄異云筴竹枝上有刺南人呼為刺勒自根橫生枝展轉如織野火焚燒只燎細枝嫩葉至春復生轉復牢固邕州旧以刺竹為墻蠻蠻來侵竟不能入又如新州旧無城紹興間黃濟來為守以筴竹環植之號竹城

廣志云攤竹細而多刺

南越志云番禺縣有棘竹長十尋大如甕其間短有輒六七

丈也為竹叢薄葉下有鉤刺或有條未如刺

白孔六帖云王武從安南都護溪壕燎柵外植刺竹冠不可冒

典籍便覽云勒竹中心空堅塞枝幹相交枝上有刺南人呼刺勒竹又名澀勒出嶺南

桂海虞衡志云筴竹刺竹也芒棘森然

本草綱目云有棘竹一名筴竹芒棘森然大者圍二尺可禦盜賊

本草綱目云棘竹十數莖叢生大者有二尺圍肉至厚中實生交州諸郡夷人破以為弓其筍食之落鬚髮

閩書南產志云勒竹枝上有刺中心堅塞枝幹相交
通雅云兩廣今多刺竹竹生卷曲煩猥竹譜名爲筴竹李石
名爲攤竹可作籬笆也

貴州通志云筴竹即筴竹嶺南竹也又名澁勒蘇軾詩倦有
浩勒脂豔村是也肇慶府志筴竹俗呼刺竹竹譜云筴竹有
刺可作籬落本草綱目記爲筴竹

高要縣志云勒竹三種小者草蕭疏可玩大者名雞距勒以
作樊圃枝幹盤固刀斧不能施雞犬不能窺新州有勒竹城
是也又一種換幹數丈節間微刺質厚堅利兵伐所必須草
不堪錄諸志作筴竹取其多力

諸羅縣志云刺竹高四五丈大者圍尺五六寸旁枝橫生而
多刺堅利人不敢犯密者可禦盜草屋取去梁柱器物資之
用甚廣

養繭目今云筴竹出西江筴生叢密節間多刺民居植之以
當藩籬宋新州守黃湊以州治無城募民環山竹雞犬不能
穿入必筴竹也

日詢手鏡云筴竹大如釣絲自根至梢皆密節有刺長寸
許山野間每數十家成一村共植此竹環之以爲屏籬則蛇
鼠不能入足可爲備禦聞後賊亦皆恃此爲金湯官軍亦
無可奈何後見續竹譜云南人呼刺爲筴音勒邕州旧以爲

棘竹

嶺表錄異白孔大帖
竹譜詳疑續竹譜

説文云刺直陽也

刺勒竹

華夷花木考
番禺縣志

玉篇云勒柝勒也

勒竹

高安縣志番禺縣志
閩書南山志

芭竹

竹譜筍譜
遵生八牋

案芭字棘刺の義か一或ハ芭と巴郡の巴とて巴菰
巴戟天の巴と同一此竹とてめその地よと傳へる
よとて名付或ハ此竹枝幹ともふ毎節鉤刺多きとの
うれもとの鉤刺の状巴字に似たるうとて其の称

せしとてある魚きうやそれハともあれしつまふ
と芭ハ棘刺の竹の名なり後世竹籬もといて芭籬
といへるハ此芭竹と以て籬籬とせしものなり芭
籬とて芭竹の名の出来しありあら

籬竹

廣志

案小葉籬と籬といひ竹籬と籬といつて籬正文まさ
小籬の作るつて或ハ籬と籬の作るものハ誤なり
又由梧竹一名籬竹芭竹に名つくこれと同名異物な
り

芭籬竹

物理小識

雞距勒 高要縣志

案、雞距ハ即棘刺ノ状相似タルをいふなり

竹

桂海虞衡志、養餘月令、本草彙言、貴州通志、竹譜詳錄、通雅

案、竹ハ勒ノ俗字なり。高陽縣志云、勒竹、諸志作竹、取其多力。これ一説なり。また玉篇、竹根也。こゝろゝとて、これハ竹譜ハ棘竹根大如十石物、縱橫相兼如繚車といふより、名付し、ふともありき。こゝろゝとて、竹譜詳錄ハ南方呼刺爲竹といふ。こゝろ時ハ竹ハ即刺竹同意なり。以上の説並ハ牽強ハ近うかぬ。

筴竹 貴州通志

荅黎竹 竹譜詳錄

此二名其義詳なり

筴竹 全上

案、筴ハ即棘ノ訛傳なり。此竹を以て圓器を作る意、こゝろハありありなり。

正誤

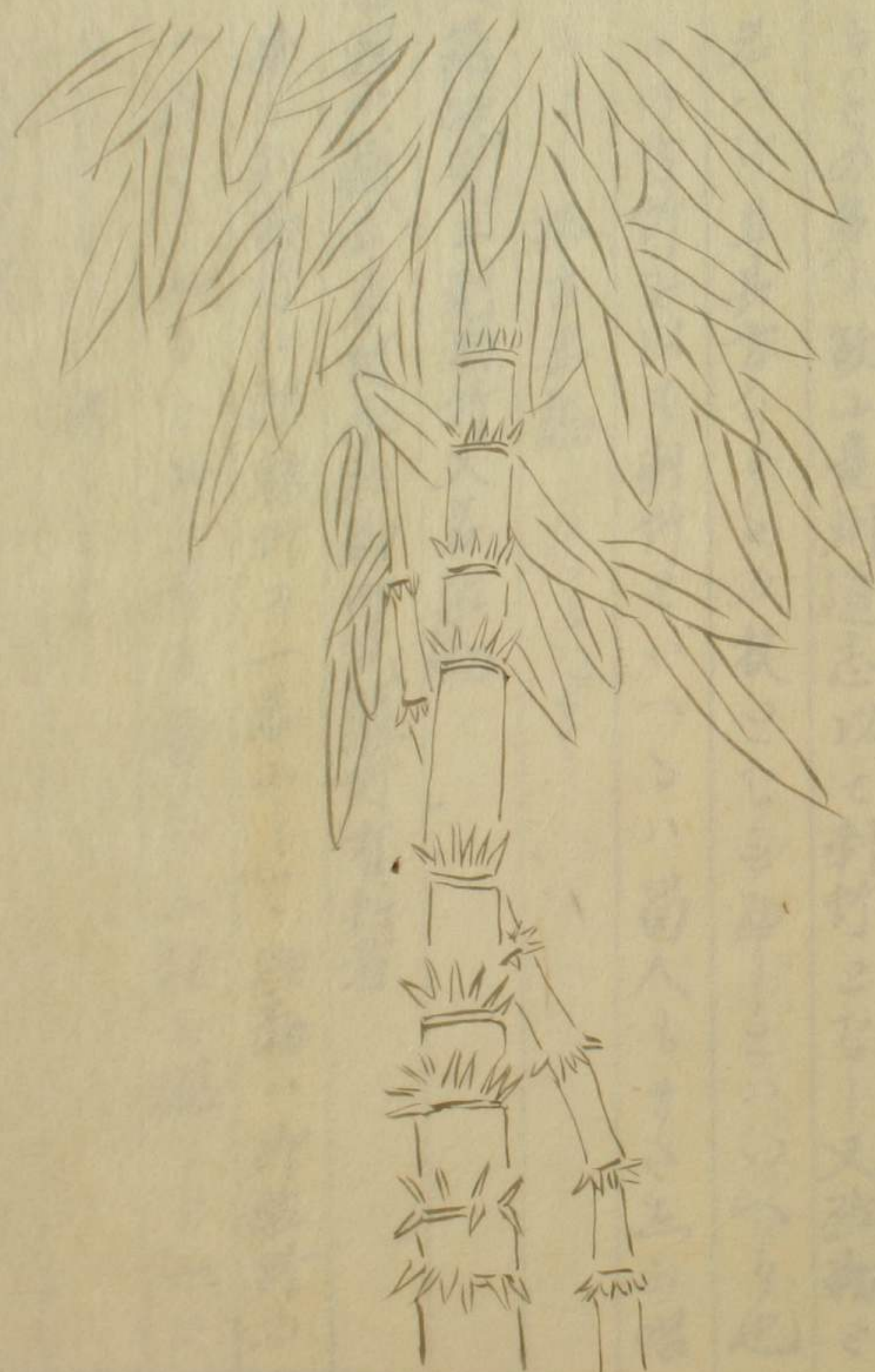
庶物類纂引桂海草木志云、棘竹一名荅竹

案、草木志云、此文ナシ。且荅竹ハその。荅頗カ砂紙のこときとのふて、刺棘ありとのふハあり。然る

と稻若水の混同して一とちとちの誤まり

貴州通志云刺竹出府属即筭竹又名流鞭竹譜云芭竹有刺具方者可作杖

案ふ貴州と云刺竹か一故ふ其土小産とも方竹の圓なりものと以て誤て刺竹と云凡方竹ハ徑一寸或ハ七八分のものハ其竹皆方と爲ともつと云と夫より以下徑四五分ものハ常竹と同く圓ふと方ならそ一林中こつとともとの大小よりとて異同あり事既よわくの如く此竹も亦刺竹と同く上半截産流ありこと砂紙のここく且根小近き三四節ハ刺あり



多しもの多し故に貴州通志以て刺竹とす又張勅と
名つけ且其方々々の杖と名をぬくといひたり也
その方竹と以て刺竹といふは蜀人もまた其の唱
るより格古要論にんてたり

典籍便覧云刺竹又名張勅

物理小識云東坡永張勅即芭羅竹有刺者

案ハ刺竹ハ即棘竹の一名ハして張勅ハ即張竹の
一名なり然りと此二書及諸志ハ二種と混して一
ことなるものの誤なり

芭羅竹

蘆蕩竹一名流竹一名流勒竹ハ今白河侯大塚の下邸に
あり其高さ大抵五六尺ありて枝幹全く矢竹のこと
葉も亦矢竹に似て五葉或ハ四葉を以て一朶こし其上
葉はこいつと二葉相對して每葉白色の間道あり又一株
の中こいつと間道なくともその色矢竹に一樣なり
と文より此種ハ往時清人の携へ來りしものなり
今其全形と詳めしむべし即矢竹の一種其葉間道あり
そのなり致し辨とさるこゝとす矢竹のことし此種
と一真物なる時ハ李息斎のいふゆゑ蘆蕩竹亦有止如
如筆管者竹譜にいふものありぬるはこゝに蘆蕩竹

ハ每節上半截ハ麓流如沙紙同上といふ今あるものハ
その竹至て細小なりといふた麓流と云ふ事なきふ
ゆゑ其真偽と辨むべし至るこゝとす矢竹の在據を
る所とすハ一種烏計竹なり其状同蘆蕩竹但不流上
こいつハ全く今ある所のものふ似たりといふこと
此種大者以て瓦屋材止ぬ柱と云いといふも亦今ある
ものなりその種異なりとのなりてす束藪竹譜に
流竹蘆蕩竹と分て二種とす流竹の図ハ麓流の如く
蘆蕩竹の図ハ麓流の如く大塚にありとのハ
此蘆蕩竹と一物なりと云ふ處のうへに流竹と

筴竹ハとこれ一物なりとの何れよりとて断く二
つに分ちりりや疑ふ

註

南方草木状云、筴竹皮薄而空多、大者徑不過二寸、皮脆
澁以錙摩象、利勝于鐵、出秦。

廣州記云、筴竹皮薄而空多、大者徑不過二寸、皮上有澁
脆文、可齒錯、子錯甲利勝於鐵、若鈍以漿水澆之、還復快利。
竹譜詳錄云、筴竹出廣石安南、又名澁竹、節長二尺餘、每
節上。

遵生八牋云、筴竹皮薄而空多、徑不餘二寸、皮上有粗可齒
錯、子錯甲利勝於鐵、若以鈍漿水澆之、如旧快利。

案、筴竹ハと筴竹ハと作らるゝ。叔此文ハと上文
と引る廣州記の文とことと、逾と餘ハ作り錯子錯甲
と錯子錯甲ハ作りまゝ、皮上有脆澁文の六字と皮上
有粗の四字ハ作まらり、その皮上有粗の文ハ誤て
粗の下ハ澁文の二字を落せしやと、今ハ筴
竹もまた原書ハと、時ハ筴竹の筴字を落せしと
のあらとと明らる。

楊升菴文集云、韻書四豪、筴字下注云、筴竹名、而不詳其
說、案異物志、南方思寧國產竹、可礪、指甲、竹譜云、可挫、心是
也、崔鶉詩曰、時一出輕芒、澁々落微雪、又李商隱射魚曲曰、

思寧弩箭磨青石鑄額垂渠三虎力。是知亦可作箭。今東廣
新州有此種。製成琴樣。為礪甲之具。用之頗久。則微滑。當以
酸漿漬之。過信宿。則堅復如初。字亦作泚。勒東坡詩。倦者泚暗
虫村。

唐政全書云。篋箒竹出篋箒國。可礪指甲。新州有此種。製成
琴樣。為礪甲之具。用之微滑。以酸漿漬之。過宿。快利如初。亦
可作箭。

正字通云。篋。相沿切。可思。篋箒竹。一枝白葉。有毒如莖。大秦
出篋箒。以錐犀象。利千鐵。泚者。以錯甲。異物志。南方志。字。國
產竹。可礪指甲。竹譜云。可坐化。今廣東新州有此種。製成琴

樣。為礪甲之具。用久。則微滑。當以酸漿漬之。過信宿。泚復初
一名泚勒。

陽春縣志云。篋箒竹皮最堅利。可作刀。泚可礪甲。其葉
有毒。能整人。異物志。出自南方。思寧國云。

高要縣志云。

案。以此云。節高。きとのハ蓋。篋箒竹。と相似。て非なり。

とのありんり

諸羅縣志云。珠羅竹。高丈許。如指大。人居用以編籬。

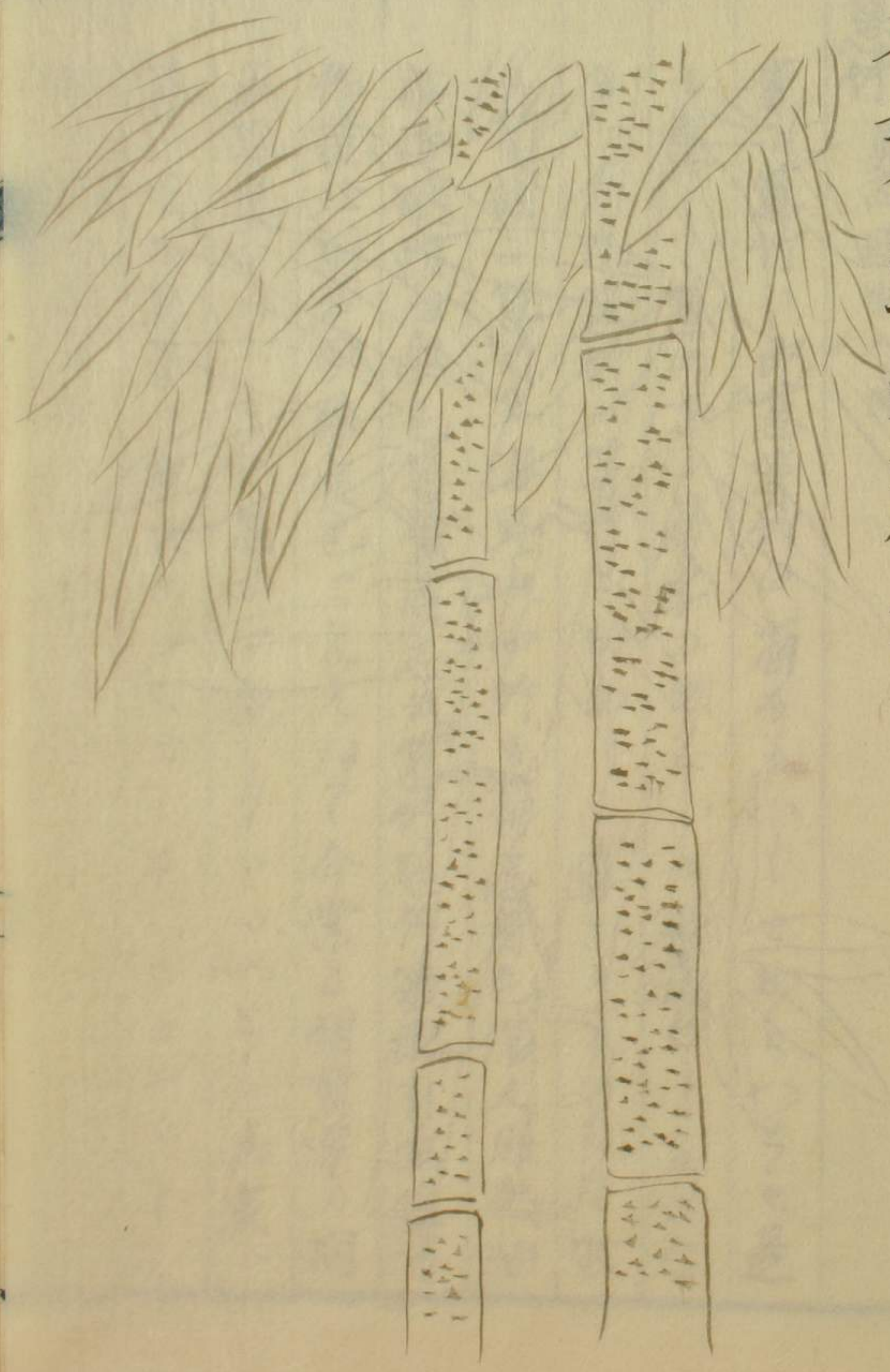
釋名

篋箒竹

南方草木狀。廣州記。
竹譜詳錄。

案ニ篋箒竹文ニ思牢ハ作ル南方異物志ニ思
 牢國産竹可礪指甲といふもの是也この竹といふ
 て其国より傳へたるふし思牢竹と名づくが
 沙古丹より出る竹と沙古丹竹といふこと西土
 にもまた篋竹及箒竹あり唐人の二種竹の名と合
 せて遂に思牢と篋箒或ハ思勞と作るものハ假借な
 る又農政全書ニ篋箒竹出篋箒國といふこと凡木の属
 木ふん竹の属竹ふんハ常るれと今國名ま
 二竹尉とかいふものハさうハ本義とすなり
 たり

東叢竹譜所載刺竹之圖





蘆竹

廣志 蓮生八歳

案小蘆竹ハ即蘆筍竹の省なり。こゝろつゝと是
 も舊より蘆の下ニ筍字のありしを磨滅せしものな
 り。凡蘆竹ハ筍竹とあり。毒ありとの事。故
 ニ筍糖ニ蘆竹生海野山。而竹与筍悉有毛傷人則死。泊
 船海嶼慎勿取毛筍食。廣志云。蘆竹堪作筍。既有毒。豈可
 作筍。此同名而殊実也。こゝろつゝと今案ニ僧賛寧の同
 名殊実とつゝハ是亦一説なり。こゝろつゝと其實ハ
 蘆の下ニ筍字の缺文あり。こゝろつゝとこゝろつゝと
 か。くハこの事。せしものなり。

此竹杜海虞傳志
竹譜詳錄

此竹全身籠罩如雪故小名つく

此竹楊升菴文集
摩唐府志

烏計竹竹譜詳錄

名義詳なり

正誤

陽春縣志云篋箒竹皮最堅利云々其葉有毒能警人

案篋箒竹ハ毒ナシ故ハ廣志ニ任作箒ニ見エナリ

其毒ありといふハ即篋竹及箒竹一名百葉竹なり然る

と陽春縣志ニ百葉竹と以て混して同物ニ篋箒竹

うと毒ありといふ思字竹ハ篋箒の字と假借せ

しとて遂ハ此竹ナシと毒ありと思ひ誤る多し

且劉涓子の説ニ箒竹有毒夫人以刺虎豹中之輒死ニ

いふふとてさハ此箒とて毒ありといふ葉の

みありあり

本草綱目云百葉竹一葉百葉其性或柔或勁或滑者可以

錯甲謂之篋箒滑者可以爲席謂之枕枝勁者可以爲戈

刀箭矢謂之矛竹箭竹筋竹石麻系者可以爲繩索謂之蔓竹

弓竹

案ニ百葉竹ハ箒竹の一名ナリ篋箒竹の一名ナリ

らひまゝ、筵、笊、挑、枝、矛、竹、箭、竹、筋、竹、蔓、竹、等、ハ、その、種、も、
こ、白、葉、竹、と、異、なり、ハ、竹、譜、筍、譜、及、ひ、諸、書、ハ、詳、し、き、然、
る、と、時、珍、ハ、多、く、て、以、上、數、種、と、よ、つ、て、同、類、と、し、この、
原、と、白、葉、竹、一、本、ハ、帰、せ、し、も、誤、り、なり、

沈竹

沈竹ハ、澤、名、と、蟲、竹、と、い、ひ、その、産、地、ハ、肥、前、國、佐、賀、ハ、在、
り、本草一、つ、ふ、此、種、西、土、ハ、産、す、る、との、ハ、每、節、蟲、と、生、
し、て、新、蟬、の、い、ま、た、翼、と、生、せ、さ、る、との、ハ、似、たり、と、竹譜
い、つ、と、も、本、邦、ハ、産、さ、る、との、ハ、その、蟲、の、形、飛、廉、の、如、く、
と、本草一、つ、つ、と、凡、西、土、と、い、ハ、此、竹、七、閩、山、中、及、ひ、婺、州、
家言

福州等ハ、少、き、と、い、つ、と、も、本、邦、と、い、ハ、た、く、肥、前、國、の、と、
と、と、その、他、ま、と、こ、れ、あ、り、と、き、う、り、

本草一、家、言、云、有、蟲、竹、生、蟲、形、如、油、蟲、者、肥、前、佐、賀、産、之、和、
名、沈、竹、

竹譜詳錄云、蟲、竹、生、七、閩、山、中、叢、生、如、蘆、每、節、生、一、蟲、如、新、
蟬、之、未、翼、者、外、無、竅、隨、竹、而、生、竹、將、老、乃、究、其、旁、而、出、今、婺、
州、東、陽、山、中、亦、有、之、八閩通志三山志
福州府志同

釋名

沈竹 本草一、家言

葉ハ、沈、竹、ハ、蓋、一、蟲、竹、の、記、轉、なり、と、又、一、種、沈、竹、ハ、

了竹譜詳錄云沈竹生是平山石質重易沈前為小弩箭
投水亦沈過凡石為礮側躬者取焉之之凡同名異物也

蟲竹

竹譜詳錄八閩通志
三山志福州府志

桂園竹譜卷之二終

